

水産資源増殖機能調査

上野 世司・大山 明彦・上垣 雅史・井戸本 純一・孝橋 賢一

1. 目的

現在の早崎ビオトープ（早崎内湖）は平成13年度から湛水され、灌漑用水を水源とし、琵琶湖と直接的なつながりを持たない水域である。19年度にはビオトープ北区と丁野木川とを結ぶ形で水路が設置された。魚類生息状況等の調査について、17年度から20年度までは毎年、20年からは隔年で実施している。

2. 方法

①水質調査 早崎ビオトープ内の北区と南区、比較のために琵琶湖岸（ヨシ帯）および丁野木川の計4ヶ所で水質調査を隔月実施した。項目は水温、pH、濁度、溶存酸素濃度、電導率、懸濁物質質量（SS）、T-N、T-P、DIN（ NH_4 、 NO_3 、 NO_2 ）、DIP、クロロフィルaとした。

②魚類相調査 魚類採捕調査を隔月実施した。早崎ビオトープ内の北区に小型定置網を設置し、24時間後に取り上げた。また、ブルーギルが北区内で繁殖しているかどうか判断するため、6月19日に北区の南西隅付近の水際に位置する礫底2㎡程度の範囲において、ブルーギル卵の有無を調査した。

3. 結果

①水質調査（図1） 24年度の北区および南区のT-N、T-P、SS、クロロフィルaなどの項目

は、過去5年に比べて概ね低く推移した。10月時の北区の調査区域は水面をヒシが覆う状態となり、水は澄んだ状態であった。

②魚類相（図2） 魚種数（フナ類は1種と数えた）は年度毎にまとめると、17年度8種、18年度7種、19年度11種、20年度16種、22年度14種、24年度9種であった。8月に多数の魚類が採捕されたが、その大部分はモツゴである。ブルーギルは、22年度に比べると減少したものの、20年度までと比べると非常に多い状態にあり、体長組成からそのほとんどが当歳魚と考えられた。調査した範囲内においてブルーギルの卵を見つけることはできなかった。

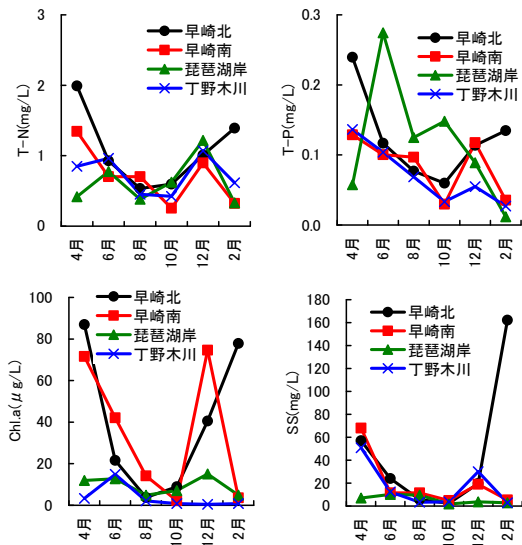


図1 北区、南区、湖岸区、丁野木川区の水質の比較（H24年4月から翌年2月）。

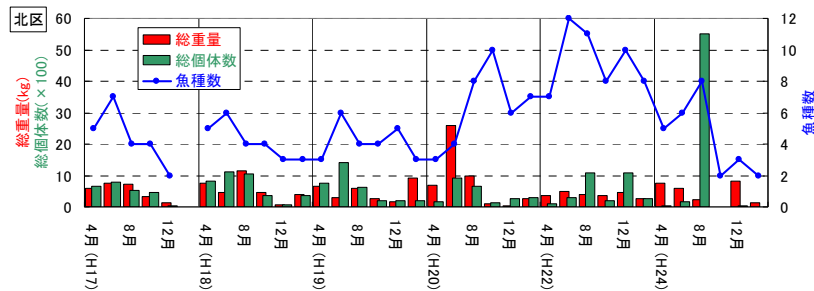


図2 北区における小型定置網による魚類採捕結果の変化。